

山と博物館

第45巻 第10号 2000年10月25日

市立大町山岳博物館

秋空の下で

丸山 卓哉



小熊山にて 撮影 丸山 卓哉

秋霖が終わつて秋らしい日が続くようになると、この山沿いの地方では春とならしい季節である。空気が澄んで山の色もはつきりとし、新雪の来たアルプスの峰々の眺めは、やがて里に下りて来るという焦りに似た気持ちをどこかに感じながらも、やはり美しい。地上も収穫の季節をむかえ、それぞれに色づき、この一年の成果を誇つているようである。梅雨の晴れ間を五月晴れというが、この季節には小春日和という言葉がある。窓からも深く陽が射すようになり、朝の冷え込みがあつてこそ日差しのうれしさを感じる。

秋の爽やかさは、大陸からの乾いた高気圧による。夏の小笠原高気圧が弱まるとき北の方から秋の高気圧が下りてくる。小笠原高気圧の勢いがまだあるうちは秋の高気圧は北に偏り、日本列島には前線が停滞して事によつては今年のようにも梅雨以上の大雨になる。やがて高気圧が日本列島の上を気圧の谷と交互に通過するようになり、時には帶状高気圧となつて、いく日も晴天が続く。

ところで、秋は日をおつて日暮れが早くなつていて。夏には一九時頃であった日没は、一〇月には一七時頃となつていて。その上、太陽が深い角度で沈んでいくので、暗くなるまでの時間が夏より二割ほど短く、これが「秋の日はつるべ落とし」の所以である。さらに、地球は楕円形を描いて太陽をまわつてゐるため、日没が一番早いのは冬至ではなく、一二月の初めになることが拍車をかけているようだ。

秋の日がとつぶりと暮れると星達の世界となる。忙しかつた一日を早く休ませてくれるようになつた輝きだす星は、他の季節とはどこか違う。おうし座、ぎょしや座、そして、ふたご、オリオンと夜半前には冬の星座も出そろつてしまつ。今、おうし座には木星や土星といった明るい惑星が花を添えて、星の世界は一段とにぎやかさを増している。秋空の下、昼間も良いが、星の世界も最高の季節である。

(山岳博物館友の会 副会長)

北アルプスに生息するツキノワグマ

泉山茂之

はじめに

古くから、ツキノワグマは強靭な身体と優れた運動能力を持つために、人々からは畏敬の念の向かれてきました。この森の住人は、とてもおとなしく神経質な生き物なのですが、「猛獸」として誤解している人も少なくありません。また近年では、農作物被害や人身被害を引き起こすこともあります。やっかいの扱いをされることもあります。おもに山村の人々との軋轢は、私の知るところ人間の側の不注意によることがほとんどで、ツキノワグマの有害駆除が頻繁に行われているのは、本当に残念なことです。ツキノワグマとの共存のためには、まずクマたちのことを良く知ることが必要です。

北アルプスで、野生動物の調査を始めた理由はいくつあります。一つは、大型の野生動物が健康に生存してゆくためには広大な生息地が必要で、人間の生産活動が困難な高山水帯や亞高山帯で生活が完結しないなら、山麓を含めた生息環境の保全が必要でしょう。北アルプスには、大型の野生動物としては、ツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザル

が生息しています。ニホンカモシカは厳格なわばかりの中でおスとメスが生活しています。

また、ツキノワグマは広大な行動圏を持ち単独生活を行っていますが縄張りは持っています。

ツキノワグマはとても神経質な生き物で、

三才以上の成獣個体について、オス一四頭、

リ科、キク科などの大型草本類が多い、亞高山帯を知ることができますのかと考

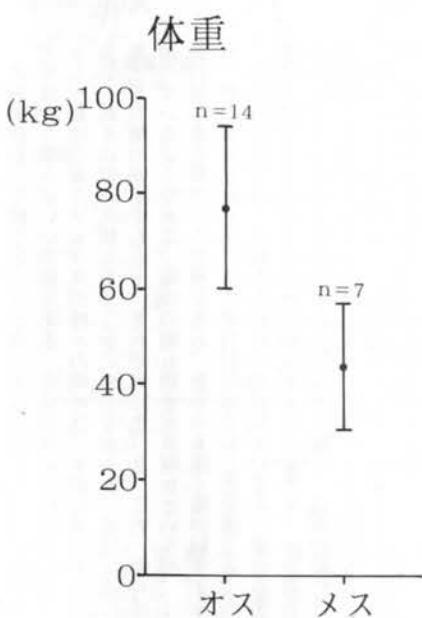
えたことです。私は大学卒業後、大学の研究機関に在籍してサルの農作物被害対策に明け暮れました。畑や造林地に依存しない、人為的な影響を受けていない野生動物たちがどんな生活をしているかを知りたいと考えました。狭い国土で野生動物と共に生息するためにはどうしたらよいのか、そのヒントがどこかに隠されているのではないかと願いました。生き物にはそれぞれの生き方があり、それぞれの姿を写す鏡を期待したのです。

ツキノワグマは山地帯から亞高山帯を経て高山帯に至る、多様な自然環境を含む広大な山岳地帯です。ここでツキノワグマは、どんな生活をしているのでしょうか。これまでに得られた調査結果からお話ししましょう。

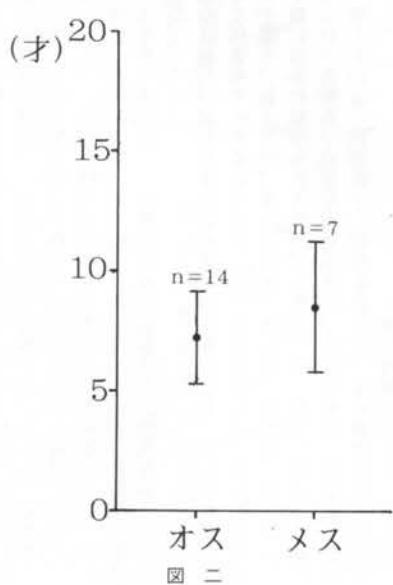
北アルプスは、山地帯から亞高山帯を経て

生きています。このように、この三種はそれぞれ全く違った生き方をしています。このような種は、*Umbrella species*（傘を差しかけて他の多くの生物種の庇護を保障する種）と言われます。これらの種が健康に生きていけるなら、他の小さな野生動物たちも健康に生きていけるはずです。

山でクマを目撃することはめったにありません。私の数少ない経験の中で、いまでも深く心に残っている情景があります。一九九一年九月一日のことです。槍ヶ岳につづく東鎌尾根から、カール底のお花畑にいる親子のクマたちを長時間観察することができました。快晴の日中、母クマは悠然と餌を食べ、その脇で二頭の仔クマがじやれあっていました。七



年齢



三才以上の成獣個体で一年以上行動追跡ができた、オス六頭、メス五頭の行動圏面積の平均は、オス四二一・〇〇 m^2 、メス二七、一・〇 m^2 でした。行動圏の最も広かつた個体ではオスでは一二一・六 m^2 、メスで八一・七

三才以上の成獣個体について、オス一四頭
メス七頭の平均年齢は、オス七、九才、メス
八、五才でした(図二)。年齢は、犬歯の後
ろにある第一小白歯を抜歯し、切片を顕微鏡
で見て、年輪を確認して確定します。第一小
白歯は退化している小さな歯で、クマの生活
に支障をきたさないと考えられています。メ
スの最年長は一八才、オスの最年長は一五才
以上でした。以上とは、それ以上の年輪が確
認できなかつたということで、一五才以上生
きていることは明かです。一五歳以上の個体
は、二〇〇〇年にも生存を確認していて、す
でに二〇才を越えています。黒い体毛を持つ
ツキノワグマも、二〇才を越えるとしらがが
増えて、頭が栗色に見えてきます。また、木
彫りのヒグマのようでおでこが出つ張ってき
ます。この個体は、一九九五年に上高地の徳
沢で捕まえたので、徳沢太郎と名付けました
私は、徳沢の主人と思つたのです。

や丹沢などに比べ、東北地方と同様に明かに大型です。北アルプスのツキノワグマのフルサイズは、オスで一〇〇kg以上になりますがメスではほとんどが七〇kg以下です。メスは成獣でも二五kg以下の個体がいます。二五kgに満たない個体でもしっかりと仔グマを育てています。

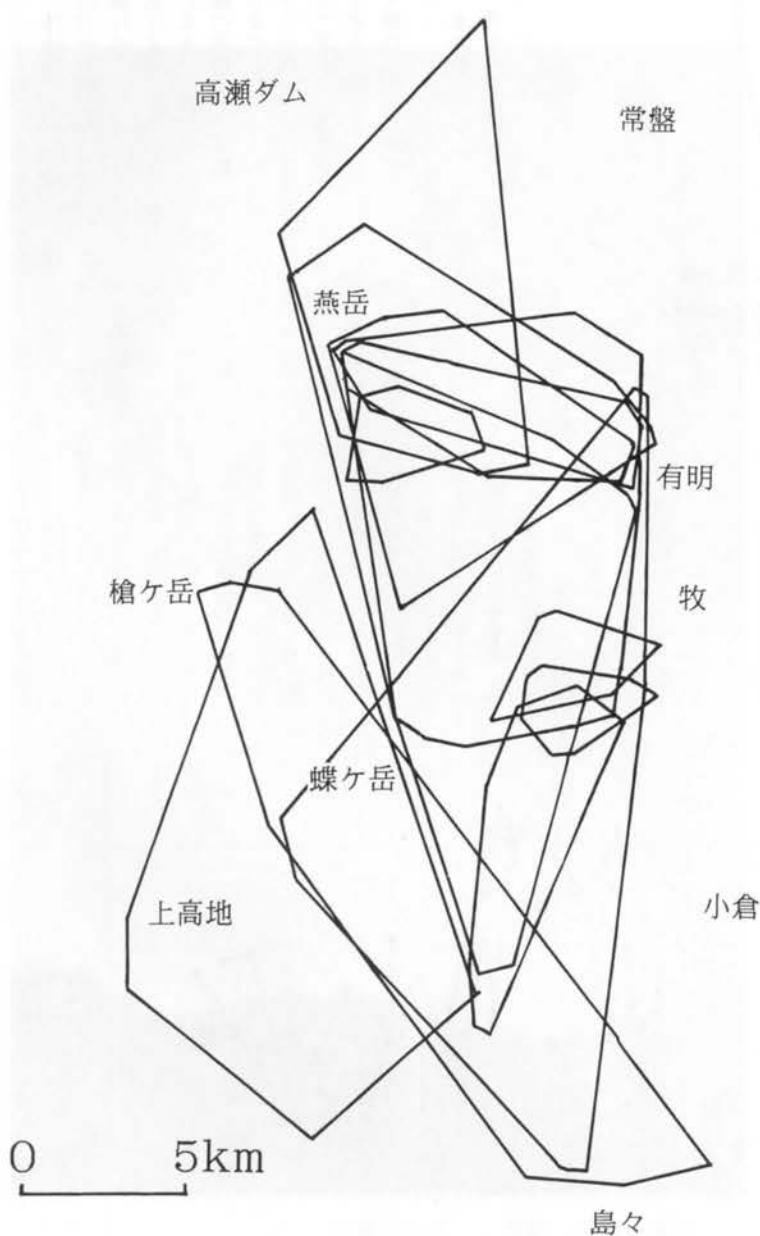
kmでした。各個体の行動圏を図3に示しました。クマたちは、アルプスの懐の奥深くから平との境界までを縦横に動き回っていることがわかります。また、各個体の行動圏は重なり合っています。他の個体の侵入に対し攻撃を行う、いわゆるなわばりは、ツキノワグマにはないと考えられます。このため、食物が豊富にある場所には、複数の個体が集まっています。その場所で、強い個体と弱い個体との関係ができることがあります。残飯を捨てていた時代、一頭ものクマがやつてき

行動パターン

ていた山小屋がありました。弱いクマは、強いかまが満腹するまで残飯にありつくことはできません。クマにも順番待ちがあります。

図四には、一九九五年に上高地で捕獲した若いオス、次郎の行動追跡の結果を示しました。次郎は放獣して数日後に、上高地側から電波が受信できなくなりました。そして、八月二〇日に蝶ヶ岳を越えて烏川側にいることを確認しました。九月上旬から一ヶ月ほど

烏川に留まりましたが、一〇月には中房川まで行き、一月になると再び烏川に戻りました。クマの行動には、定着→移動→定着という行動パターンが良く見られます。次郎は、一月一〇日に烏川から去った後、三日後には直線で約一八km離れた局々で発見しました。クマが直線的に動くことはありませんので、次郎は二〇km以上の距離を三日で移動したことは間違ありません。私は、クマの移動能力に驚かされました。



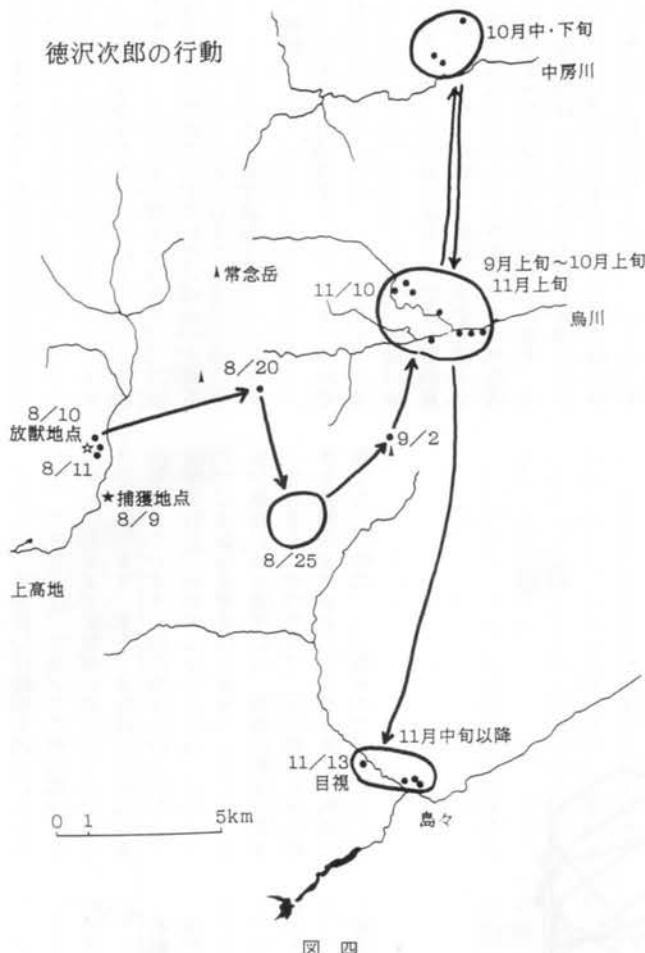
三

季節移動と環境選択

四五には、一九九六年にアルプスの稜線で捕獲した、ささというメス成獣の確認標高を示しました。標高二〇〇〇m以上での確認は、六一八月であることがわかります。九月以降は、標高二〇〇〇m以上での確認はほとんどなくなります。高山帯や亜高山帯上部に出現するクマたちの主食は、お花畑のシシウドやアザミなどです。しかし、ミズナラのドングリが主食となる九月以降は、標高一六〇〇m以下の落葉広葉樹林で確認されました。これまで、高山帯や亜高山帯上部で捕獲したクマたちは、すべての個体が季節移動を行っていました。毎年、槍ヶ岳から山麓の島々までの二〇〇kmの道のりを、三年間にわたり往復す

ることを確認したメス個体もいます。高山帯や亜高山帯上部の利用は、アルプスなどの高山でなければ見られない行動様式です。毎年夏には、山麓でトウモロコシなどの農作物被害により、多数のクマたちが有害駆除されています。山麓のクマたちにとっては、夏は試練の季節です。夏は芽生えがなくなり、稔りもまだないという端境期にあたります。アルプスの稜線では、雪渓の周囲では夏の終わりまで芽吹きがあります。端境期のない高山帯や亜高山帯上部のお花畑は、クマたちにとって優れた採食場所です。

おりに
落葉広葉樹林でしつかりとドングリを食い



図四

クマたちは、北アルプスの厳しい自然にしつかり根ざした生活をしていながら、人為的影響がクマたちの生活に深く関わっていると考えられます。

クマたちは、北アルプスの厳しい自然にしつかり根ざした生活をしていながら、人為的影響も深く受けていることがわかります。また、一方で

(野生動物保護管理事務所)

溜めたクマたちは、移動を行なう再び標高を上げて冬眠をします。冬眠穴は、シナノキなどの落葉広葉樹の樹洞や岩穴を確認しています。しかしほとんどの個体が、人が近づくことすらできない、厳しい地形の場所で冬眠しています。

狩猟解禁日を、まるでクマたちは知っているかのようですが、冬の場所になっていますが、冬眠をする個体はほとんどいません。鳥川にはクマたちが冬眠することができるよう大きな木があります。造林が進んだ鳥川の谷では、クマたちの生活は完結しないようです。このように、人為的な影響がクマたちの生活に深く関わっていると見えられます。

山と博物館 第45巻 第10号
発行 平成12年10月25日発行
定印
大糸ターム
大糸タイムス印刷部
郵便振替口座番号00540071353
FAX 0261-231-1211
年額 1,500円(送料込)(切手不可)

